

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

野口和子先生

日 時：2009年9月19日
場 所：東京都文京区大塚
聞き手：茨木智志・鈴木正弘

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた諸先生方の歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、様々な経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回の「歴史教育体験を聞く」では、野口和子（のぐち かずこ）先生にお話を伺うことができた。野口先生は1924年のお生まれで、戦争中に東京女子高等師範学校を卒業され、戦後はお茶の水女子大学附属高校の社会科教師として、世界史教育の始まりの時点から世界史の授業を担当されてきた。

以下は、野口先生のインタビューの記録である。

1. 実践高等女学校でのこと

— 本日は、よろしくお願いいたします。はじめに、東京女子高等師範学校に入学されるまでのことをお聞かせ下さい。

私は、大正13（1924）年3月生まれで、85歳です。生まれは、東京の品川区です。小学校を卒業した後、本当は、府立第六高女¹に入りたかったのですが、落ちまして、私立の実践高等女学校²に入学しました。

実践では、下田歌子³先生の最後の学年でした。下田先生は、もとは平尾^{せき}鉦とおっしゃって、お歌（和歌）が上手なので、歌子のお名前を頂いたそうです。5年生になると、源氏物語とかを下田先生が教えて下さると、みんなが楽しみにしていました。

¹ 府立第六高女：東京府立第六高等女学校、現在の東京都立三田高校（東京都港区）。

² 実践（實踐）高等女学校：現在の実践女子学園中学校・高等学校（東京都渋谷区）。

³ 下田歌子：1854年～1936年10月。歌人・女子教育家。実践女学校（実践高等女学校の前身）の創設者。

昭和 11 (1936) 年 4 月に入学した後の一学期の終業式のときに、下田先生がお出ましになりました。私立ですから、前に下田先生がいらして、理事長と校長とともに、お三かたで講堂に入っていたら、もうお歳でしたので背は低かったですけれど、黒の縮緬^{ちりめん}のお召し物で、袖が紅絹^{もみ}という赤い裏でした。そのとき、「このままだと、日本はアメリカと戦争になる」とおっしゃいました。私は子どもでしたが、うかがって「えっ、アメリカと戦争になるの?」と思いました。このときのお話を、私は不思議に覚えています。

3 年生のときに、岐阜の岩村⁴が下田先生の郷里でいらっしゃるので、三回忌のお墓参りにそこまで行った覚えがあります。先生がたは夜行列車で、私たち生徒は学年で二人だけだったのですけれど、昼間の汽車で行きました。向こうでスカートを整えなくてはいけないのですが、炭を入れた火のしアイロンを使った覚えがあります。ご主人⁵よりも下田歌子先生のほうがお偉かったから、墓石が先生のほうが大きかったのを、先生は「それは、いけない」と同じ大きさにしたとか聞きました。

— 実践高等女学校での歴史の授業はいかがでしたか。

私は実践での歴史の先生にあこがれまして、歴史の先生になろうと考えました。田中八重先生というかたで、年齢としては当時の私より 30 歳くらいお上でした。とてもしっかりした、いい先生でした。その先生が授業の中で、いろいろなことを聞かせて下さいました。例えば、「一回、言葉で出してしまったら、四頭立ての馬車で追いかけても、二度とその言葉は戻ってこない。いい加減なことを言うてはいけない」とか。昔の授業は、ただ授業の内容だけでなく、いろいろなことを折々にお話しして下さいました。

その田中先生が東京女高師（東京女子高等師範学校⁶）のご出身だということで、私も女高師に行こうと思いました。当時、実践には専門部⁷があつて、更に上をめざす生徒は専門部に行きましたので、女高師に進もうという人はいませんでした。4 年生くらいのときに、田中先生に、「私は女高師を受けても大丈夫でしょうか」と伺いましたら、「頑張ればいいじゃないの」と言われて、頑張りました。

2. 東京女子高等師範学校での生活

— 東京女高師は、全国から優秀な生徒が集まったと聞いておりますが。

⁴ 岩村：岐阜県恵那郡岩村町（現在は恵那市）。

⁵ 下田猛雄：1884 年没。

⁶ 東京女子高等師範学校：現在のお茶の水女子大学（東京都文京区）。高等師範学校は中等学校教員養成のための 4 年制の高等教育機関で、男子が東京と広島、女子が東京と奈良にあった。

⁷ 実践女学校高等専門学部：現在の実践女子大学・実践女子短期大学（東京都日野市）。

昭和 16 (1941) 年 4 月に入って、その年の 12 月には戦争になりました⁸。入学の写真はあるのですが、卒業の写真はありません。

私たちのときは、文科で 30 人でした。卒業して全国に行くことになりますので、全国から生徒が来ていました。中国からの人が一人、朝鮮からの人が一人、今の韓国ですね。その二人が留学生で、残りが 28 人でした。東京は、女高師附属⁹から一人、府立第一高女¹⁰から一人、府立第二高女¹¹から二人、東京市立の高女から一人、私立の実践からの私で、6 人でした。他の人はみな、地方から来ていました。女高師には古くから文科、理科、家政科がありました。それと体育科がおくれてできました。

全員が寄宿舎に入ります。このときに、ちゃんと布団を作って持って行きます。布団を入れる場所が狭いものですから、それに合わせた大きさの布団を用意しましたので、母が「なんか、女中さんにやるみたいで寂しいね」と言ったのを覚えています。

— 寄宿舎ではどのような生活だったのでしょうか。

菊、梅、蘭、竹の 4 つの寮がありました。私たちのときは、梅の番外というのもありました。一部屋は 8 人でした。6 畳くらいの二つの畳の部屋があって、真ん中にそれぞれの机のある自習室があります。確か、夜 7 時から 9 時までは勉強の時間でした。そして、9 時になると消灯でした。部屋には、文科も理科もなく、入ります。だいたい各学年二人の 8 人でした。4 年生のかたが室長でした。

ふつうは 4 年間、寄宿舎に入ります。私たちは東京ですけど、それでも 2 年間は寄宿舎に入る決まりでした。ところが、私たちが 2 年生になるときに、理科を 30 人増募した関係で、東京の人たちは 1 年で自宅に帰すことになりました。1 年間で寄宿舎を出るに当って、舎監の先生から、「本当は、先生になるための師範教育なのだから、立派な先生を養成するのに寄宿舎に入れているけれども、増募になったから、寄宿舎を出るあなたたちについては親に委託するのだ」と、「教師になるための教育を親に託すのだ」と言われました。なるほどと伺いました。舎監の先生も、もちろん女性です。寄宿舎は男子禁制でした。私たちの先輩のときは、よき時代でしたので、食堂でいろいろな会が催されて、社交ダンスもさせたと聞いています。そういうときには本校（東京女高師）から男の先生もいらして、お相手をしてくださったそうです。

⁸ 1941 年 12 月 8 日には、真珠湾攻撃により対米英開戦（太平洋戦争）となった。

⁹ 女高師附属：東京女子高等師範学校附属高等女学校、現在のお茶の水女子大学附属高校（東京都文京区）。

¹⁰ 府立第一高女：東京府立第一高等女学校、現在の東京都立白鷗高校・附属中学校（東京都台東区）。

¹¹ 府立第二高女：東京府立第二高等女学校、現在の東京都立竹早高校（東京都文京区）。

3. 東京女子高等師範学校の先生がた

— 東京女高師には、どのような先生がたがいらっしゃいましたか。

東京文理大¹²の東洋史の有高巖¹³先生とか、西洋史の内藤智秀¹⁴先生とか、私はお習いしました。日本史の豊田武¹⁵先生もいらっしゃいました。

文部省からいらした豊田先生は、若くて情熱のあるかたでした。みんながたいへん、あこがれました。豊田先生は陸軍に召集されましたが、そのときに、私たちは、小さな手帳に感謝の言葉をいろいろと寄せ書きしました。それを先生が持って行ったら、夜になると上官に、どこそこを「開けて、読め」と言われて、とても気恥ずかしかったとおっしゃっていました。でも、じきに帰っていらっしゃいました。本校の奥に歴史教教室があって、新しい日本史のお話を私たちは伺いました。

石門心学¹⁶を研究されていた石川謙¹⁷先生が、私たち1年生の担任でした。石川先生からは、教育学を教わりました。

菅原教造¹⁸先生からは、棟方志功¹⁹というすばらしい人がいるのだと教わりました。

尾上柴舟²⁰先生は、歌人で、行成流²¹の書がすばしかたでした。書道を教えていただきました。一行でも書いていただきたいと思いましたが、するっとお逃げになります。とても洒脱な先生でした。尾上先生は、「日清・日露戦争の感激を、いくら話をしても、お前たちは何も感激しない」と怒っていらっしゃいました。今度は、私が教師になって、太平洋戦争の話をしても、生徒は分らないんですね。同じことかと思いました。

教育学の倉橋惣三²²先生というかたが、いらっしゃいました。幼稚園の園長もなさっていました。体のしっかりしていらした、面白い先生でした。倉橋先生の教育学は、各科の合同で大きな合併室で授業がありました。席は名簿順で、私は海老沢でしたから、前から2番目くらいの列にいました。先生が大きな字で黒板に書かれたのを見て、

¹² 東京文理科大学：現在の東京都文京区にあった大学。戦後の新学制下で東京教育大学となり、現在は筑波大学（茨城県つくば市）。

¹³ 有高巖：1884～1968年、東洋史専攻。

¹⁴ 内藤智秀：1886～1984年、西洋史専攻。

¹⁵ 豊田武：1910～1980年、日本史専攻。

¹⁶ 石門心学：江戸時代中期の石田梅岩を始祖とする庶民の道徳に関する学問や教化の運動。江戸時代に広く支持を受けた。

¹⁷ 石川謙：1891～1969年、教育史専攻。

¹⁸ 菅原教造：1881～1967年、心理学、美学、服飾学専攻。

¹⁹ 棟方志功：1903～1975年、版画家。

²⁰ 尾上柴舟（八郎）：1876～1957年、歌人、書家、国文学者。

²¹ 行成流：三蹟の一人で、平安中期の公卿・書家の藤原行成が完成させた書風。

²² 倉橋惣三：1882～1955年、幼児教育専攻。

思わず「わあ、汚い板書だ」と言ってしまったら、振り返って「お前は、そういうことをするんじゃない」とおっしゃいました。闊達な面白い先生でした。

地理は飯本信之²³先生でした。なんか難しい本を買わされて。体の大きなかたで、いつもカーキ色の洋服で、堂々としていらっしゃいました。2年生になって、巡検があって、修善寺（静岡県）や箱根（神奈川県）のあたりに連れて行っていただきました。

— 文科に入られたというお話ですが、文科系のすべての勉強をされるのでしょうか。

文科は、1年生・2年生では一緒に全部やります。3年生になると、地歴（地理歴史）と国漢（国語漢文）に分かれます。私は地歴で、女高師は師範教育ですので、私の持っている教員の免状は、修身、教育、地理、歴史、それから国語でしたでしょうか。地歴の人は、国漢のどちらかを取ります。国漢の人たちは、地歴のどちらかを取りますので、地理だけとか、歴史だけになります。また、国漢では、書道の免状を取っていましたね。地歴では古文書を読むのに苦労しました。

— ここに、東京女高師の文科の昭和18（1943）年改正の学科課程表²⁴を持ってまいりました。「歴史」は、「国史」「東亜史」「世界史」となっていますが、このような授業はありましたか。

私たちのときは、国史、東洋史、西洋史だったと思いましたが。

— 手元にある学科課程表では、その前は明治43（1910）年のもの²⁵になってしまうのですが、「歴史」は、「本邦史」「東洋史」「西洋史」「教授法」となっています。この中の「教授法」というのはどのような授業でしょうか。

「教授法」であったのかは分かりませんが、附属の稲村テイ先生というきれいなかたが、1年生のときに、地理の話をして下さったのは覚えています。

私が附属高校の教師をしていたときには、教科教育法として附属高校から大学に行って、学生たちに講義をしていました。

4. 戦争中の東京女子高等師範学校

— 野口先生が東京女高師に在籍されていたのは、ちょうど戦争中ですが、どのような学生生活であったのでしょうか。

²³ 飯本信之：1895～1989年、地理学専攻。

²⁴ 「昭和18年改正の学科課程表」『お茶の水女子大学百年史』、同刊行委員会、1984年、186頁。

²⁵ 「明治43年11月改正の学科課程表 文科第1部・第2部」、同上書、124頁。

3年生、4年生になると、戦争が激しくなったので、あまり勉強はできませんでした。1年生のときには、全員ではありませんでしたが、東京在住の者が休みのときに勤労働員²⁶で青山（現・東京都港区）の連隊区司令部に行きました。3年生のときはまだよかったのですが、4年生のときは、ほとんど動員でした。

教育実習は附属の学校に行きます。昔は、附属の先生が指導教官として実習をご覧になって、実習の点が悪いと大変なのだと聞きました。私たちは4年生のときに附属の国民学校（小学校）に2週間、附属の高等女学校に2週間だけで、残りは全部、動員に行っていました。そのころ、動員は板橋の兵器廠²⁷（しょう）²⁷に行つて、馬具を作っていました。そこで作業していたおばさんが「こんなもの作ったって、もう船がないから行かないんだよ」と話していたのを覚えています。

3年生になると、下関（山口県）あたりに集合して、朝鮮から大連²⁸にまで行くという修学旅行が、以前にはあったと聞きました。私たちのときは、3年生になっても、志賀高原（長野県）の寮にも行けなくなっていました。3年生になったら志賀高原に行きたいと話をしていましたが、それもだめでしたね。

— 当時、特に印象に残っていることをお聞かせ下さい。

昭和17（1942）年の4月だったと思いますが、突然に敵機が一機、女高師の上を通つて早稲田方面に飛んでいき、そして煙があがったことがありました²⁹。当時、飛行機を見るのは珍しいので、附小（附属小学校）の児童も飛び出してきました。通学生、私たちも窓から顔を出したのですが、どうも日本のではないらしいと思った途端、附小の児童は、さっと校舎内に逃げました。そして、先生がたも部署につかれ、平井美奈子³⁰先生が本校の入り口のあたりに防空頭巾をかぶって立っていたことを覚えています。

それから、昭和18（1943）年の10月でしたか。学徒出陣がありました³¹。あれは、

²⁶ 勤労働員：第二次大戦中に中等学校以上の学生・生徒（学徒）を軍需工場や食糧増産に動員した。1943年に本格化し、1944年に強化されて、1945年度からは国民学校初等科（小学校）以外の授業は原則として停止されて、すべての学徒の総動員が実施された。

²⁷ 兵器廠：兵器廠は兵器の生産等を行なう機関。現在の東京都板橋区に陸軍兵器補給廠があった。

²⁸ 大連：中国遼寧省の遼東半島に位置する港湾都市。当時の遼東半島は関東州として日本の租借地であった。

²⁹ 1942年4月18日、米陸軍による初の日本本土空襲が行われた。東京には6機が飛来し、39名の死者を出した。東京女子高等師範学校の近くでは、南西の方向に隣接する小石川区関口水道町（現・文京区）、牛込区早稲田鶴巻町・馬場下町（現・新宿区）で多くの被害を受けた。

³⁰ 平井美奈子：1902～2004年、声楽専攻。

³¹ 学徒出陣：大学・高等専門学校の学生・生徒の徴兵猶予を、1943年9月に戦局の悪化のために一部を除いて停止した。10月21日に明治神宮外苑競技場（現在の国立競技場〔東京都新宿区〕）で出

やはり印象に残っています。神宮外苑でした。私、行きましたよ。生徒は、みんな行きました。雨が降っていたと思いました。それこそ大変ですよ。学生服で学徒出陣で出て行くわけですからね。ずうっと長い列であったのを覚えています。何か今、あのへんに学徒出陣がここだという記録の碑が建っているという話を聞きました。

附属高校の教師をしていたとき（後述）に、教科教育や教育実習の件で、大学にいらした春日喬³²先生という心理学の先生のお部屋に伺ったところ、学徒出陣の写真が貼ってありました。それを見て、「あ、先生」と申し上げたら、「ぼくも、これはとても印象に残っているんだ」とおっしゃっていました。私よりお若い春日先生も、やはり思いがおありだったのだと印象深く思いました。

以前にテレビでしたか、学徒出陣のときに決意を述べて、出征して帰って来たかたが紹介されていたのをたまたま見ました。「あ、この人じゃないかな」と思ったんですよ。そのかたは、運よく戻ってらしたのですよね。・・・やはり、みんな重荷を持っているんですよ。自分だけは生き残ってしまったと。友達に死んでしまったと。だから、もう何も言えないし、ということがありますね。私たちは女だから行かれなかったけれど、男だったら当然出て行ったと思うから。やはり、それなりの重荷はありますよ、今でも、私は。

— 昭和 20（1945）年 3 月卒業の予定が、戦時短縮で半年繰り上がったと伺いましたが、その頃の事をお聞かせ下さい。また、教員としての任地はどのように決まるのでしょうか。

私たちは、昭和 19（1944）年 9 月の卒業になります。私たちには、卒業のときに、「〇〇に赴任すべし。授業課目〇〇、一週〇〇時間」と書かれた小さな紙を、4 年生担任でいらした尾上先生がお配りになりました。それを見て、お互いに「どこへ行くの？」という感じでした。学校を卒業したら、三日間くらいで任地に行かなくてはいけないというものでした。

— 派遣される任地は、出身地とは限らないのですか。

限りません。すべて国が決めるものですから。ただ、外地³³については、先輩がたはともかく、私たちの昭和 19（1944）年の頃は、満州とか、朝鮮とかにはほとんど行かれなくなっていました。ただし、事前に任地の希望は、第三希望まで出します。私なんかは、「東京、東京、東京」と書いていましたけれど。

陣学徒壮行会が行なわれた。現在、出陣学徒有志による「出陣学徒壮行の地」の碑が建てられている。

³² 春日喬：1934 年生まれ、心理学専攻。

³³ 外地：戦前において内地（北海道、本州、四国、九州）以外で日本が支配していた台湾、朝鮮、満洲（中国東北部）などの地域を指す。

私の先輩の親泊千代³⁴さんという人は、ひめゆりの塔³⁵で亡くなっています。あのかたは沖縄出身でしたから。沖縄の第一高等女学校³⁶で、生徒と一緒に最期まで。大変な時代でした、本当にね。

5. お茶の水女子大学附属高校への赴任

— 戦後に教師になられたころは、どのような状況だったのでしょうか

私は、昭和 19 (1944) 年 9 月に卒業して、終戦後まで出仕としてお勤めしたあと、昭和 21 (1946) 年に東京都立桜町高等女学校³⁷に就職しました。ただし、結婚しましたので、ここは 1 年ほどで辞めました。このときは、歴史の他に、国語も教えました。国語は免状も持っていますし。それから、文部省から視学が来るとかで、地理も教えさせられました。仕方がないから、アメリカなんかの地図を掛けてやりました。新任の若い人は使われますからね。このときの歴史の授業については、あまり覚えていません。

— 昭和 20 (1945) 年 12 月に、修身・日本歴史・地理の授業停止の指令³⁸が出されていましたが、もう解除された頃でしょうか。また、教科書の墨塗りはなさいましたか。

どこかで、生徒と墨で教科書の黒塗りをしたのを覚えています、どこでしたか、それは忘れてしまいました。

— お茶の水女子大学附属高校へはその後、就職されたのでしょうか。

昭和 24 (1949) 年 10 月に附属高校に行きました。そのころは家にいましたが、急

³⁴ 親泊千代：1945 年没。1943 年の二学期に地理歴史の教師として出身校の沖縄県立第一高等女学校に赴任した。ひめゆり学徒隊引率の唯一の女性教師であった（宮城喜久子『ひめゆりの少女 十六歳の戦場』高文研、1995 年、34～35 頁）。

³⁵ ひめゆりの塔：沖縄本島最南端にある慰霊塔。大戦末期に動員によりひめゆり学徒隊の看護婦として勤務して戦死した沖縄師範学校女子部、県立第一高等女学校の生徒・職員 226 名を合祀している。なお、ひめゆり学徒隊の他にも沖縄戦では中等学校・師範学校の男女生徒が動員され、多くの犠牲者を出した。

³⁶ 沖縄県立第一高等女学校：現在的那覇市にあった高等女学校（戦後に廃校）。

³⁷ 東京都立桜町高等女学校：旧・東京府立第十一高等女学校、現在の東京都立桜町高校（東京都世田谷区）。

³⁸ 1945 年 12 月 31 日に占領軍から「修身、日本歴史及び地理停止三関スル件」の指令が出され、1946 年 1 月から新しい教科書ができるまで三教科の授業が停止された。

に呼ばれました。なんでも、10月に教育実習が始まるときに、附属にいらした先生が急にアメリカに行っておしまいになって、たまたま教育実習の指導教官が必要になったので、家にいるようだから来いということでした。「子どもがいるから、とても、とても。本官はいやです」と言った覚えがあります。それから、ずっと昭和60（1985）年まで勤めましたから、長いですね。

6. 始まりの頃の世界史授業

— 当時の世界史はどのような授業でしたでしょうか。

はじめは、世界史を、東洋史と西洋史に分けて受け持ちました。昭和24（1949）年度は、生徒の希望により、東洋史が一講座、西洋史が二講座でした。

東洋史の担当は、徳山正人³⁹先生でした。のちに文部省にいらしたかたで、女高師のときの附属での私たちの指導教官でもありました。西洋史の担当は、尾鍋輝彦⁴⁰先生がされていました。この頃の附属は、校長と呼ばずに主事と言っていたのですが、その主事先生が私に言われるには、「尾鍋先生の西洋史を一講座、持つように」と、「徳山先生に東洋史を持たせたのは、尾鍋先生と徳山先生は東大出身と文理大出身だから男同士で具合が悪い」と、「お前だったら女高師出身で女だし、お二人の偉い先生の間に入っても、まだ若いからいい」ということでした。

「大学の入試もあるのだから、少なくとも第一次世界大戦まで終わるように」と言われましたが、10月に行ったときには、まだ、キリスト教の歴史をやっていました。このときの授業は、急にアメリカに行かれた先生のあとを引き受けての授業だったと思います。

— 尾鍋先生でしたら、教科書は、『100ページの世界史⁴¹』でしょうか。

教科書は、尾鍋先生の『高等学校世界史⁴²』ではなかったかと思います。ただ、何年度に使ったのかは正確に記憶していません⁴³。

— その後も東洋史、西洋史で分けて世界史の授業をしていたのでしょうか。

³⁹ 徳山正人：1915～1993年、東洋史専攻。

⁴⁰ 尾鍋輝彦：1908～1997年、西洋史専攻。

⁴¹ 尾鍋輝彦『100ページの世界史』新教育事業協会、1949年。

⁴² 尾鍋輝彦著『高等学校世界史』1～3、三省堂出版、1950年。尾鍋輝彦が関わった、当時の世界史教科書（準教科書）には次のようなものもある。三上次男・尾鍋輝彦共著『世界史』上・下、中教出版社、1950年。中屋健一・尾鍋輝彦共著『現代世界のなりたち』上・下、実業之日本社、1951年。

⁴³ 昭和28（1953）年3月の卒業生の一人は、尾鍋輝彦の西洋史（世界史）2講座の内の一方を受けた（2年生のときと思われる）と話をしている（野口氏の補足による）。

その後は、基本的に世界史ですね。附属高校は先生の数が少なく、社会科は基本的に地理、歴史、一般社会で3人しかいないですから。後で、政・経や倫理がないと困るということで社会科の定員増を図りますけれど、附属高校は大学から定員が来ていますから、他の教科を減らすことになりますし、教員定数が難しいんです。つまり、世界史は、私が一人で持っていたということです。

— 昭和22(1947)年に、文部省から東洋史と西洋史の学習指導要領が発行され、昭和27(1952)年には世界史の学習指導要領が発行されましたが、授業の参考にされましたでしょうか。

当時は、まったく知りませんでしたし、附属高校の社会科の中でもあまり話題になった記憶はありません。

— どのようなものを使って、授業をされていましたか。

附属高校に行ってから、掛け地図を使いたいと思いました。本校(女高師)で豊田先生たちも使われて、教えていただいていたので。そうしたら地下室にあるということで、広げてみたら湿気で、びしょ濡れになっていて、だめになっていたのを生徒と一緒に後ろを裏打ちして使ったのを覚えています。

そのころは、資料集もいいのありませんでした。「これがいいよ」と教えてもらったのが、『世界史アルバム⁴⁴』でした。あれがよかったので、よく使いました。教師用の予算があったため、それでクラスの人数の半分だけ買いました。毎時間、『世界史アルバム』を持って来させて、掛け地図を掛けて授業をしました。

教科書は、好学社の世界史教科書⁴⁵をよく使いました。大類^{のぶる}伸⁴⁶先生監修、吉岡^{つとむ}力⁴⁷先生執筆のものです。大類先生の西洋史の参考書⁴⁸が、女高師にいたときから私はたいへん好きでした。授業への入り方がいいと感じましたし、私には馴染めました。やがて、しばらくして生徒から「先生、こんなのを使っていたらだめです。東大は山川の教科書でなければ」と言われ、それで山川出版社の教科書にかえました。生徒がうるさくてね。でも、山川出版社の教科書は、書いてある文章が堅苦しくて、私は嫌

⁴⁴ 京大西洋史研究室編『世界史アルバム』創元社、1950年。

⁴⁵ 大類伸監修・吉岡力他編『高等世界史』好学社。1951年7月23日検定、1951年11月29日発行のものが、高校の世界史で初めての検定教科書5種のうちの一つとして正式には1952年度から使用された。大類伸・吉岡力の好学社の世界史教科書は書名を変えながらも1969年まで発行され、その前後からは吉岡力著として1978年まで発行された。

⁴⁶ 大類伸：1884～1975年、西洋史専攻。

⁴⁷ 吉岡力：1908～1975年、西洋史専攻。

⁴⁸ 大類伸は多くの西洋史教科書・参考書を書いている。特に『西洋史新講』(富山房、1934年)は、戦後も版を重ねた。

いでした。吉岡力先生は『世界史の研究⁴⁹』でお名前は知っていましたが、特に面識はありませんでした。

— 野口先生は、ご自身は世界史を教わずに、世界史を教えた世代かと存じますが、世界史の授業をするに当って、どのようなものを参考にされましたか。学生時代に習われたことでしょうか。

私が受けたのは、師範教育ですよ。お作法の先生に「あなたたちの中には、学者になる人は何人かいるかもしれないけれど、学者じゃないのだよ、教育者だよ」と言われました。それですから、教育者になるつもりでいました。それしか能はありませんし、昔の親は女高師に行かせるだけで精一杯で、それから文理大に行って⁵⁰お嫁に行かなくなったらどうしようという時代でしたし、教師になると思っていましたし、先生になりたくて、みんな来ていました。

つくづく思うのですが、本当に師範教育ですね。ですので、東洋の部分を教えているときにも、漢文の『唐詩選⁵¹』などが、補助教材みたいに教えられるでしょう。今時の資料集を扱わなくてもね。そういう意味では、いろいろなものを広く浅く教えられましたので、教えるときの頼りにはなりました。師範教育のよさだったと思います。完全に教育者養成でした。

逆にいうと、どうして大学で西洋史と東洋史でやっていて、世界史という講座がないのかと思います。ですから、専門性が強くなってくると学者にはいいのですが、教師には向かないのかもしれない。

7. 世界史教育への取り組み

— 世界史の授業をするに当って、他に組み込まれたことにはどのようなことがありますか。

附属は1学年が35～40人の3クラスで、子どもにつき込んでいる親も多いところですから、私はこういうところで教えていても、世の中には通じないと思いました。もっと一般の広いところを見なくてはと思いました。だから都立新宿高校（東京都新宿区）とか、東京教育大の附属高校⁵²によく行って、授業を見せてもらいました。

新宿高校にいらした武井正教⁵³先生には、ずいぶんと教えていただきました。総合

⁴⁹ 吉岡力『世界史の研究』（旺文社）は、1949年初版以来、長く版を重ねた世界史参考書である。

⁵⁰ 東京文理科大学は、基本的には男子の東京高等師範学校卒業生もしくは3年次修了生が入学したが、東京女子高等師範学校の卒業生も入学することができた。

⁵¹ 『唐詩選』：中国の唐詩の選集。日本では江戸時代から現在まで漢詩の入門書として広く読まれている。

⁵² 東京教育大学附属高校：現在は筑波大学附属高校（東京都文京区）。

⁵³ 武井正教：1922年生まれ、世界史専攻。

歴史教育研究会でしたか、どこかで武井先生と知り合いました。そうしたら、まず、はじめにルネサンスの部分は何ページとかで書いてくれと頼まれて書きましたら、やがて新宿高校の武井先生とお茶の水女子大附属高の野口編著という『問題解法の技術 世界史』（研数書院）が生まれました⁵⁴。武井先生の縦（時間）と横（空間）との世界史⁵⁵はたいへん丹念で、すばらしい評判でした。

— 武井先生は、学徒出陣で雨の中を行進したと伺いました。

そうですか。私より一級上だと思いましたが、都立高校で活躍された蜷川寿恵⁵⁶先生も学徒出陣でした。

昭和26（1951）年から28（1953）年まで、立正大学（東京都品川区）の夜学に通いました。戦後の学制の変動で、女高師を卒業しても、確か、扱いが短期大学になりました。ですから、当時は夜学で単位を改めて取る教師も多かったので、私もそこに行き行って単位を取ってしまおうと思ったのです。そのときに、それこそ有高先生とか、内藤先生とかに再びお習いしました。漢文も取ろうと思って、漢文の先生のも取りましたよ。だけど、学校が終わってから、夜行くものですから、5時から9時まで二講座取りたいのですが、職員会議があって、5時に間に合わなかったら、「可」を付けられたかな。女は人数が少ないから代返が効かないのです。日本史の高瀨正人⁵⁷先生は、本当に努力家で、ずいぶん教えていただきました。

それから昭和32（1957）年ごろから、聖心女子大学（東京都渋谷区）の大学院に入って勉強しました。私は、キリスト教の三位一体説⁵⁸がどうしても分らなかったのですが、それでも授業で教えていました。聖心女子大学には内藤先生がいらしたので、うかがいに行ったら、大学院に入ることになりました。西洋史の木間瀬精三⁵⁹先生、キリシタン史の海老澤有道⁶⁰先生など、いろいろな先生がたの講義を受けて、子どももいて忙しい中、苦勞しましたが、3年かけて修了しました。

— 鎌倉歴史教育研究会には、どのようなきっかけで参加されたのでしょうか。

⁵⁴ 都立新宿高校教諭武井正教・お茶の水女子大学附属高校教諭野口和子編著『問題解法の技術 世界史』研数書院、1961年8月初版、1963年4月第32版。なお、その後には、代々木ゼミナール武井正教監修、都立国立高校宇野沢伸和・お茶の水女子大附属高校野口和子著『要約整理 世界史』（研数書院、1985年）も発行されている。

⁵⁵ 武井正教『新編集 武井の体系世界史 構造的・理解へのアプローチ』（栄光、2006年）などがある。

⁵⁶ 蜷川寿恵：1924年生まれ、日本史専攻。なお、蜷川寿恵『学徒出陣：戦争と青春』（吉川弘文館、1998年）がある。

⁵⁷ 高瀨正人：1925年生まれ、日本史専攻。

⁵⁸ 三位一体説：父なる神、子なるイエス、聖霊の3者は本来一体であるという、4世紀に確立したキリスト教の教理。

⁵⁹ 木間瀬精三：1911年生まれ、西洋史専攻。

⁶⁰ 海老澤有道：1910～1992年、キリシタン史専攻。

吉田太郎⁶¹先生と、出版社の文理の研究会だったとおもいますが、知り合いになりました。吉田先生から「これからは、女の人もいろいろ勉強しなくては、だめだよ」と言われて、鎌倉歴史教育研究会⁶²に出席するようになりました。「鎌倉の吉田学校」と呼ばれていました。たいてい、土曜の午後、神奈川県のあるかの中学校の部屋を借りて会が持たれました。私は土曜日の学校が終わった後に参加しました。「越境入学です」と言って出席して、教えていただいていた。ここでは、小中高を一貫する歴史教育が研究されていました⁶³。

鎌倉歴史教育研究会の本⁶⁴の「あとがき」に、北村幹雄先生という横浜の先生が書いておられますが、その北村先生がやっていたのは、事前に次の何ページかをどこがポイントかを調べさせて、そこから授業に入っていくという方法でした。私も、そこで教えられまして、北村先生の方法を真似てやりました。

— 他にも世界史の教師として、いろいろなところで活動されたと存じますが、いかがでしょうか。

文部省や東京都でいろいろな研究会がありました。そこで、文部省にいらした平田嘉三⁶⁵先生、その後に文部省にいらした星村平和⁶⁶先生とも知り合いになりまして、先生がたには、いろいろと声を掛けていただきました。吉田太郎先生もそうですが、私は先生には恵まれました。

文部省の仕事もさせていただいていました。大検（大学入学資格検定試験⁶⁷）の試験とか、沖縄からの国費の学生⁶⁸の試験とかの世界史の問題を作成していました。また、教科書の検定もありました。昭和 36（1961）年くらいから昭和 55（1980）年くらいまで、なんだかんだといって、文部省には使っていただきました。これが、とても

⁶¹ 吉田太郎：1903～1999 年、日本史・歴史教育専攻。

⁶² 鎌倉歴史教育研究会：1958 年設立の研究会。同会には、吉田太郎編著『歴史教育内容・方法論史』（明治図書、1968 年）、同会編『歴史教育への提言』（第一学習社、1983 年）などの著作がある。

⁶³ 小中高を一貫する歴史教育に関連して、野口氏は全国歴史教育協議会第 16 回大会（1975 年、東京）、同第 17 回大会（1976 年、群馬）で提案している。詳しくは、野口和子「提議（その 5）次の学習指導要領改定に何を望むか」（『全歴研紀要』第 12 集、1976 年 3 月）および「提案（その 3）小中高の関連を考慮しながら改訂学習指導要領における社会科内の歴史分野をどのように位置づけたらよいか（50 年度の討論会をふまえて）」（『全歴研紀要』第 13 集、1977 年 3 月）を参照されたい。

⁶⁴ 鎌倉歴史教育研究会編『続 歴史教育への提言』かまくら三窓社、2000 年。なお、同書では野口氏も「教師生活をふりかえって—これからの歴史教育—」を執筆している。

⁶⁵ 平田嘉三：1925～2008 年、西洋史・歴史教育専攻。

⁶⁶ 星村平和：1931 年生まれ、歴史教育・社会科教育専攻。

⁶⁷ 1951 年から 2004 年まで実施された、合格者に大学入学資格を与える国家試験。2005 年度以降は、高等学校卒業程度認定試験に移行している。

⁶⁸ 戦後の米国統治下の沖縄県からの大学生に対して、日本政府による公費琉球学生制度（後に国費琉球学生、国費沖縄学生と改称）という育英奨学事業が実施されていた。

勉強になりました。

教科書研究センター（東京都江東区）での仕事もありました。附属高校で一緒にいた徳山先生が理事をされていました。このとき、一緒にいた朝倉隆太郎⁶⁹先生や山本友和⁷⁰先生にも、いろいろなことを教えていただきました。

—（茨木） 私が学生のときに、教科書研究センターの『旧制中等学校 教科内容の変遷』に、野口先生がお書きになった論文⁷¹で勉強させていただきました。

歴史は、日本史を吉田太郎先生、東洋史を上野実義⁷²先生が担当されて、私は西洋史を割り当てられました。このときは、目黒にあった国立教育研究所⁷³に行って西洋史の教科書を調べました。

— 野口先生が取り組まれてきた世界史教育のテーマについて、お聞かせ下さい。

世界史教科書の中には、東西交渉史がほとんどありませんでした。中国思想のフランス西漸⁷⁴とか、ケネー⁷⁵とか、チュルゴー⁷⁶とか、それに陶器についてもありませんでした。世界史教科書の記述で、東洋と西洋のつながりが希薄と思われたので、実際には延々とつながっていることを、どこかで教えたかったのです。それが私のテーマでした⁷⁷。教え子で最近、東西の陶器についてまとめた人がいましたが、そういう大きな広い意味で、世界は一つだということを認められないといけないんじゃないかと思っています。

⁶⁹ 朝倉隆太郎：1921～2002年、地理学・地理教育専攻。

⁷⁰ 山本友和：1948年生まれ、社会科教育・公民教育専攻。

⁷¹ 野口和子「《西洋史》」（財団法人教科書研究センター編『旧制中等学校 教科内容の変遷』ぎょうせい、1984年）。後に加筆されて、野口和子「明治・大正時代における中学校の外国史教育—万国史から西洋史へ、そして世界史への示唆—」（『お茶の水女子大学附属高等学校研究会研究紀要』第30号、1985年3月）としてまとめられ、さらに『教育学論説資料 第5号』（論説資料保存会、1985年）に採録されている。

⁷² 上野実義：1910～1987年、東洋史・世界史教育専攻。

⁷³ 国立教育研究所：現在は国立教育政策研究所（東京都千代田区）。

⁷⁴ 中国思想のフランス西漸：17～18世紀を中心としたフランスでの宣教師や知識人、思想家による中国思想の受容と影響。詳しくは、後藤末雄『中国思想のフランス西漸1・2』（平凡社〔東洋文庫〕、1969年）などを参照。

⁷⁵ ケネー：1694～1774年、フランスの重農主義経済学者。

⁷⁶ チュルゴー：1727～1781年、フランスの政治家、重農主義者。

⁷⁷ 野口和子「実践研究 ルイ十四世と中国と — 一七世紀における東西交流 —」『月刊歴史教育』第6号、1979年9月。なお、野口氏には、科学研究費補助金奨励研究（B）として、「17・18世紀の西欧世界における中国観—ルイ14世時代を中心として—」（1968年度）、「18世紀西欧史学史における中国像」（1973年度）、「19世紀西欧世界における中国観」（1977年度）の研究がある。

- 『月刊歴史教育』に、皇妃テオドラ⁷⁸や「女の平和」のアリストファネス⁷⁹を取り上げた実践についてお書きになっていますが、女性をテーマとした世界史実践として、どのような取り組みをされてきたのでしょうか。

私は、授業の中で、女の人の生きざまを取り上げたいと考えました。けれども、あまり、やらないで来てしまったと思います。

『月刊歴史教育⁸⁰』は、昭和 59 (1984) 年に廃刊になってしまいましたね。最終号に、生徒の「歴史離れ」についての文を寄せました。その中で、生徒の目から見れば、歴史は「覚えることが多くて、面白くないし、入試で点にならない」と言われているので、今の高校が持っている問題点はそれこそ大学入試が主だから、そのつながりの中で考えてくれないと困るんじゃないかということを書きました⁸¹。まず、教科書をもう少しちゃんと編集しないといけないですよ⁸²。

8. 社会科教師として

- 附属高校の教官として、教育実習の指導もされていたと思いますが。

自分が附属学校に教育実習に行ったときには、事前に放課後、教室の後ろに友達を座らせて板書をして、黒板には縦に何字入る、横に何字入るとまで準備して、明くる日の授業に出ていました。

でも、自分が指導教官になった時期には、学生はそこまでしませんでしたね。勉強もあまりしなくなりました。実習生の中には、唐の王維⁸³について、生徒から「王維という名前が教科書には、詩人と画家と 2 箇所出てきますが、同じ人物ですか」と質問されて、「別人です」と答えてしまうような例もありましたし、後漢の明帝(めいてい)⁸⁴を「みんてい」と読んでしまうような例もありました。若い人は、もっと勉

⁷⁸ 野口和子「皇妃テオドラ」『月刊歴史教育』第 47 号、1983 年 2 月。テオドラ(500 年ごろ～548 年)は 6 世紀の東ローマ帝国皇帝ユスティニアヌス 1 世の妃であり、共同統治者であった。

⁷⁹ 野口和子「ギリシア文化の取り扱いーアリストファネスー」『月刊歴史教育』第 24 号、1981 年 3 月。アリストファネス(前 448 年ごろ～前 380 年ごろ)は古代ギリシアの喜劇作家。「女の平和」はその代表作。

⁸⁰ 『月刊歴史教育』は、歴史教育研究会編として東京法令から、1979 年 4 月～1984 年 6 月まで 63 号にわたって発行されていた歴史教育雑誌。

⁸¹ 野口和子「「歴史離れ」の声のなかで」『月刊歴史教育』第 63 号、1984 年 6 月。

⁸² 上記の他に、野口氏は世界史教育に関して、「Ⅱ 「世界史」における人物指導の意義と実際 一 諸外国における人物指導の状況」(前川貞次郎・木村尚三郎・平田嘉三編『双書 新しい世界史教育 2 新しい世界史教育の方法』明治図書、1972 年)、「雲(アリストファネス)」「中世に生きる人々(アイリーン・パウア)」「蒼き狼(井上靖)」「ルネサンスの女たち(塩野七生)」(星村平和編著『文学作品を利用した世界史学習』学事出版、1976 年)などを執筆している。

⁸³ 王維：701 頃～761 年、中国唐代の詩人、画家。

⁸⁴ 後漢の明帝：28～75 年、中国の後漢第 2 代皇帝。

強してくれないと困りますね。先生になりさえすれば、月給が取れるというものではないですよ⁸⁵。

— お茶の水女子大学附属高校で行なわれていた「現代社会」は、学習指導要領で定められた「現代社会」⁸⁶以前のものと存じますが、どのような経緯で、どのように実践されたのか、お聞かせ下さい。

このとき附属高校の社会科は、加藤章⁸⁷先生が日本史で、世界史が私で、大和田順子⁸⁸先生が地理でした。それから倫社・政経⁸⁹の持田行雄⁹⁰先生がいました。加藤先生は大変に意欲的なかで、私たちが加藤先生の提案に呼ばれて、「現代社会」をやらうじゃないかということになりました⁹¹。

1年生に置こうか、3年生に置こうかと悩みました。3年生に置くのは受験もあるし、^こ酷ではないかとも話が出ましたが、やはり一通り勉強した後で「現代社会」をやったほうがいいのではないかということで3年生にしました。こうして3年生週4時間必修で昭和48（1973）年度から実施しました。

4人の教師が自分のできるところで何をしようかと考えて、テーマを分けました。私は、ちょっと野望的というか、世界史と同じ話をしても面白くないから、まったく別なことをしようと思いました。それで結局、私は「現代世界における人権の問題」ということで、「公害」は持田先生、「国際問題」は大和田先生で、「歴史の中の婦人問題」が加藤先生と分担しました。

私は「現代世界における人権の問題」ということで、インドと東南アジアとアフリ

⁸⁵ 野口氏は、教育実習に関して「教案の立て方と授業について—教育実習を通じて—」（『総合歴史教育』第2号、1966年）を執筆している。また、自身の教育実習の経験を注93の「体験的授業論」の中で紹介している。

⁸⁶ 「現代社会」：高校において1978年版学習指導要領により導入され、1982年度から1年次4単位必修として実施された社会科の科目。その後、1989年版学習指導要領により必修科目から外されて公民科の科目となり、1999年版学習指導要領では標準2単位とされて、2009年版学習指導要領に受け継がれている。

⁸⁷ 加藤章：1931年生まれ、日本史・歴史教育専攻。

⁸⁸ 大和田順子：地理学専攻。

⁸⁹ 倫社・政経：「倫理・社会」と「政治・経済」。「倫理・社会」は、現在は「倫理」。

⁹⁰ 持田行雄：1937年生まれ、倫理学専攻。

⁹¹ お茶の水女子大学附属高校でのこのときの「現代社会」については、野口氏の「社会科「現代社会」の取り扱いについての一試案」（『総合歴史教育』第11号、1975年）、「シンポジウム「高等学校社会科の構造—総合的科目の構想—」提案3「現代社会」という総合科目について」（『社会科教育論叢』第21号）、「高等学校社会科における総合科目—現代社会の構想—」（『お茶の水女子大学文教育学部附属高等学校研究会紀要』第19号）を参照。また、野口氏には科学研究費補助金奨励研究（B）として、「高等学校「現代社会」における教材の研究—主として太平洋地域における—」（1980年度）、「高等学校「現代社会」の教材の発掘と研究—とくに衣・食・住の分野における—」（1983年度）の研究がある。注63での野口氏の提案の中にも「現代社会（仮称）」が含まれている。

カとアメリカの4つに絞りました。生徒に調べさせたり、何冊かの参考文献の中から本を2冊読ませたりしました。私自身は生徒の読んだ本を読まなければいけないし、発表させたこともありましたが、そうとうに負担は厳しかったです。でも、自分としては面白かったですね。単に世界史の延長の時間をもらってしゃべるよりは、生徒たちを動かしたほうがいいと感じました。

附属高校での3年生必修の「現代社会」は、1年生必修の「現代社会」が始まるまで、続けました。これは、他の学校での授業を参考にしたものではありません。また、附属高校でのこの「現代社会」が、後に行なわれた「現代社会」とどう関わっていたのかは分かりません。それから平田先生とご一緒に「現代社会」の教科書も書きました⁹²。

— 受験の圧力は、野口先生が附属高校にいらした間にどの程度、変化がありましたか。また、社会科の授業以外で取り組んでいらしたことは何ですか。

退職して20年も離れていますので、現在のことは分かりませんが、あのころは結構、生徒は東大を目指していました。下手すると教師を見捨てていました。はっきりしていますよ、そのような生徒は、学校の授業をサボって、予備校に行っていましたから。今は東大を捨てて他に行く人も増えましたけれど。お茶の水の父兄はそういうところでお金を使いますから。教科書も生徒数の倍を用意すると本屋が言っていました。つまり家庭教師のところに置く分を買うわけです。でも在校中は、大学受験を一生懸命やりましたということは言いませんから。卒業して聞くと初めて話します。

それとは別に、落ちこぼれてしまう生徒もいるわけです。「先生は、東大を受けるような生徒ばかりを見ている」という非難もありました。このようなときには、教科を離れてホームルームなどで、「10年間で勝負しよう」と言ったことがあります。「高校は3年間だけど、10年経ったときに、あなたがどういう風になっているか見たいから」と言いましたら、勉強はあまり得意でない生徒でしたが、美術のほうに進みましてフランスまで行って修復の勉強をしてクラス会に来た人もいました。学校の勉強だけではないのだということを、折にふれて言ってきました⁹³。

— 野口先生の教え子で、都立深川高校（東京都江東区）で世界史を担当している山田美保先生からの質問です。長年にわたり世界史教育に取り組んでこられた野口先生がお考えになる、世界史教育で最も重要なことは何でしょうか。

⁹² 平田嘉三他『高等学校現代社会』第一学習社、1981年3月31日検定。この教科書は、その後、式部久他として発行されて、「新訂」「改訂版」の1997年3月31日検定、2000年2月10日発行の教科書まで野口氏が執筆者として参加している。

⁹³ 野口氏は、生徒との関わり、ホームルーム、教育実習などについて述べた「体験的授業論」の連載を執筆している（『高校教育展望』小学館、1982年4月号～8月号）。また、野口氏は、文部省により刊行された『高等学校における生徒指導上の諸問題 生徒指導研究資料 第1集』（文部省編、大蔵省印刷局、1969年）の作成に参加している。

世界史でも何でも、人間を作ることですから、授業はまず生徒が好きになってくれればよいと思います。そうすれば、勉強してくれるのではないかと思います。

あえて世界史教育と言いませんが、私たちはやっぱり戦争中の思いをずっと持って、ここまで来ていますから、そのような、いろいろな意味で今の日本があるのだということを考えてほしいし、そういうことを若い人には何かのときに教えて欲しいです。歴史はつながっているものですから、いろいろな人が苦勞したり、命をかけたりして、ここに来ているのですけれど、今の人たちはそういうことはあまり実感がないと思うのです。先生として生徒と相対する授業を持っていられるところにいらっしゃるのであれば、折りに触れて自分の経験なり、先達の経験なりをしゃべって、今の日本がここまで来たのだから、これからの日本を本当の意味でどのように育てていくのか、生徒にもその一員になってほしいということを、授業を通さなくても何かの折に伝えてほしいですし、先生がそういう気持ちでいけば伝わるのではないかと思います。

— 現在、どのようなことに取り組まれていますでしょうか。

附属高校の同窓会（^{きくら}会）で月1回の西洋史の授業をしています。昭和60（1985）年に附属高校を退職した後の昭和63（1988）年から始めました。卒業生と一緒に勉強しています。最年長の受講生は74歳です。

— 本日は、長い時間、お話をして下さいまして、本当にありがとうございました。

後記

お忙しい中、インタビューのお願いを快くお引き受けいただき、多くの貴重なお話を伺うことができた。ただし、伺ったお話のすべてをまとめることができず、聞き手の力不足を特に痛感した。また、これまでインタビューをお願いした先生がたは皆、男性であったために聞き手は意識することがなかったが、女性として一貫して女子の教育に携わってこられた野口先生には、別な観点からもまだまだ伺うべきことがあったのではないかと反省している。なにより、教育者としての強い矜持をもって弛まぬ研鑽を継続されてきた姿勢に圧倒されるばかりであった。

最後に、原稿作成の段階でも、ご多忙の中、幾度も多くのご教示を下さった野口先生に心から感謝を申し上げます。

（注記に関して、多くの先生のご協力とご教示を仰ぎましたこと、また、さまざまな文献やホームページの情報も利用させて頂きましたことを申し添えます。）

（文責：茨木智志）